

新たに入会された皆さん  
正会員、団体会員

・金平京子  
・特活(共生苑)

寄付をいただいた皆さん

・鶴丸 悌二  
・宝塚の芸術倶楽部  
・中山 光子  
・濱本 佳子  
・牧里 每治  
・橋田 てつ子  
・山崎 絹代  
・山上 美保  
・岡本 光子  
・特活(ゆーあい  
・匿名1名

新たに入会された皆さん  
賛助会員

・中野年一  
・(株)フロンティア  
・リレーション

(順不同、敬称略 期間：2016年6月1日～8月31日まで)

宝塚市立勤労市民センターにて、展開中の事業にも寄付いただいています

100色 珈琲 つばめ 文庫



計 144,973円  
2016年4月1日～8月31日



ご支援ありがとうございました。

(認定) 宝塚 NPO センター会員募集・継続のお願い

宝塚 NPO センターは、「市民が市民を支える社会」を作るために、市民活動の支援をしています。人がつながり仲間になる、仲間がつながり地域になる、地域がつながり社会になる、その全ての場面を支えるセンターでありたいと考えています。私たちの活動を、会員として一緒に支えて下さいますようお願いいたします。

※認定 NPO 法人への寄付は税制面で優遇されます。

会費

個人正会員	団体会員 (NPO 法人他)	法人正会員	賛助会員
10,000 円		30,000 円	3,000 円

振込先

	銀行振込	郵便振替
銀行名	三菱東京 UFJ	
支店	宝塚支店	
口座番号	普通預金 3629422	00930-8-77117
力ナ	トクテイヒエイリ タカラツカエヌビーオーセンター	タカラツカエヌビーオーセンター
口座名義	(特) 宝塚 NPO センター	宝塚 NPO センター



(認定) 宝塚 NPO センター

〒665-0845  
兵庫県 宝塚市 栄町 2-1-1  
ソリオ1-3F  
TEL: 0797-85-7766 FAX: 0797-85-7799  
E-mail: zukanpo@hnpo.net  
URL: http://hnpo.net/  
駐車場: ソリオ1...30分 200円

発行人: 牧里 每治 編集人: 中山 光子

宝塚 NPO センターニュース  
TAKARAZUKA  
NPO CENTER  
NEWS

市民の手で市民活動を支える

88 このニュースの編集、発送はボランティアの皆さんにご協力いただいています

2016.9

世界水準で考え、  
地域目線で動く、  
怒りと感謝が NPO を動かす

宝塚 NPO センターは  
メールマガジンを月 2 回配信しています

zukanpo@hnpo.net  
上記アドレスに「配信希望」とご連絡ください

みなさまの寄付で支えられています

http://hnpo.net/support/  
認定 NPO 法人に寄付をすると税金が戻ってきます

特定非営利活動法人  
ネパール・ヨードを支える会 理事長 熱田 親憲

## ● 協働の場づくり

<第5次総合計画 市民のつどい開催協力>

まちの未来の設計図づくりともいえる総合計画。その計画を広く知ってもらいたい。そしてなによりその啓発イベントを今まで関わらなかった人が出会うきっかけにできないだろうか。そんな想いを込めて7月31日と8月7日に行われた「第5次総合計画 市民のつどい」。総合計画に委員として関わった人、知らなかったけれど興味がある人、市職員と宝塚NPOセンター総勢7名が実行委員会形式をとり企画をしました。

4月からスタートした委員会では、参加者同士が出会い、未来のまちづくりについて話し合えるプログラム構成を中心に考えました。タイトルや広報物のデザインも含め実行委員それぞれの特技を活かし、まさにサブタイトルの「市民と行政は、ともに何ができる？」を追求した4か月でした。その甲斐あって、2日間で10代から80代までの計121人の参加を得ることが出来ました。

回収率84%のアンケートに書かれたコメントからも多くの方が多様な意見交換を愉しまれていたことが分かりました。興味関心のある特定分野をこえて話し合い、皆でひざを突き合う会場のあちらこちらで笑い声が響きました。その光景から出会い、話し合う場の大切さを感じました。また実行委員会に色々な場で活動している人達が参加することで、これまで出会わなかった人をつなぐ場作りになることを実感しました。この経験と関係の積み重ねがまちをつくる一歩になると確信しています。



基調講演は、近畿大学  
総合社会学部 久 隆浩先生



後半の意見交換会で  
それぞれの思いを共有しました



みんなの足で支える円形机  
「えんたくん」

## ● 人と組織づくり

<宝塚市ソーシャルビジネス創業支援事業>

今年度から始まった宝塚市ソーシャルビジネス創業支援事業は、ソーシャルビジネス（社会課題を解決しながら、継続するための活動資金を自ら稼ぎだす事業）を起業したい人達を対象にした4日間の講座でした。

本講座では「参加者のスキルアップだけでなく、実際に起業まで到達すること」を目標に掲げ、宝塚NPOセンタースタッフと外部講師が二人三脚でつくりあげました。その甲斐あって12名（男3女9）の参加者は皆本気で取り組み、とても充実した講座となりました。講座はソーシャルビジネスの仕組み、考え方、収支計画の立て方などを学び、次講座までの一週間は自身の事業計画を宿題として進めるプログラムでした。参加者からは「4日間ではなく1ヶ月の講座だった」「今までなかなかまとまらなかった事業計画が寝不足になりながらもできました」などハードな講座内容に対して満足の感想を多くいただきました。2017年1、2月に後期の部が開講予定です。ソーシャルビジネスに興味のある方は是非ご参加ください。



ほとんどの参加者が皆勤で参加



ワークショップで学ぶ収支計画



最終日、SB事業計画を個人発表

コラム

## 「経済の貧困より、知識の貧困の方が深刻」

ネパールの風土病；ヨード欠乏症と取り組んで16年、ターゲットを妊婦に絞ってヨード補給活動に切り替えて10年になります。具体的にはフジッコ株式会社（神戸市）より昆布ミネラルカプセルを無料供給いただいて、妊婦にヨード補給し、ヨード欠乏のない赤ちゃんを産んでいただくという目的で、国立チョウタラ病院（シンズールパルチョウク郡）に来院された妊婦に施しております。誕生した赤ちゃんは体重も重く元気で誕生しても、以降の自宅での育児の状態をフォローするとヨード欠乏や過多、他の病気に罹患していることも判明。衛生と栄養知識のある食事改善が望めます。経済の貧困より、知識の貧困の方が深刻だと痛感している今日この頃です。

特定非営利活動法人 ネパール・ヨードを支える会 理事長 熱田 親憲

取材に行ってきました！！

## 「医学的解決よりも、社会的解決が決め手になる」

WHOによるとヨード欠乏症は世界人口の2割にあたる15.7億人が直面する健康問題。その最も深刻な状況にある国といっても過言でないネパール支援のために活動する特定非営利活動法人ネパール・ヨードを支える会は、阪急逆瀬川駅にほど近いところに事務所があります。理事長の熱田さんと事務局長の水野さんから話を伺いました。



きめ細やかな健診で効果を把握



衛生教育キットの配布



協働で現地の先生に栄養教育

## 「きっかけは身近な出来事から」

ネパールでボランティアとして活動されていた熱田理事長の娘さんが1996年に現地の方と結婚。翌年生まれたお孫さんがヨード欠乏で起こる甲状腺の病気だと聞かされました。ショックを覚えたと同時に、ネパールには同じ病気を抱える子どもや女性が数多くいることに気付いたのが活動のきっかけ。お孫さんが完治した後、病気の子どもたちへの支援と調査研究を8年つづけ、先天性の発症を継続的に予防するため、そして健康な人々がネパールを支える日を夢見て2008年に法人化されました。

## 「地域に信頼されることが活動の基礎になる」

ネパールでは1970年代からすでに国家計画としてヨード添加塩を供給する等ヨード欠乏症対策は進んでいましたが、物流環境も整わない状況で輸送されるヨード添加塩は野積み状態。現地では岩塩が好まれていたことや、風雨にさらされ埃まみれになる塩を一度水洗いしてから使う習慣もあったため、添加されたヨードが流れ出ていました。また当初、ネパール大使館に行き活動を説明した際には、「自分のやりたいことだけやって帰る日本のNPOには期待していない」と言われた熱田さん。いかに現地の実情を見ず、自己都合で活動する人や団体が多いかを表していると思われたそうです。

文字が読めない女性の割合が多く、ヨードどころか基礎的な栄養教育もなされていないネパール。自らの身を守る術を持たない人々にただ物品を渡すだけの対処的な支援に限界を感じた時、地域社会の実情に合わせ信頼を得ながら栄養・衛生教育、教員育成を含めた社会的な支援がヨード欠乏症問題の根本解決になると考え、活動を続けられています。

## 「NPOを動かす“怒り”と“感謝”のチカラ」

今では、ネパールの力になりたいと志を同じくする仲間が増えつつあると嬉しそうに語る熱田さん。企業として活動に賛同しヨードを含む昆布ミネラルカプセルの無償提供を快諾されたフジッコ株式会社との協働だけでなく、女性の地位向上のため教員育成支援を行う特定非営利活動法人日本ネパール女性教育協会や震災支援を行う公益社団法人アジア協会アジア友の会と協働で活動されています。熱田さんのお話からは協力者への感謝と、なにより選んだ道で救われる方がいることに対する喜びと同時に、悲しく困難な現実に対する怒りにも似た感情を感じました。自分たちが何のために存在し、活動しているのか。その哲学がない人や団体はどうしても活動手段や視野が狭くなり、協力も得られず、続きません。怒りを客観的に見つめ、解決に向けて日々謙虚に出来事に仕える。それこそがNPOを動かすチカラの源なのかもしれません。